論文内容の要旨

論文題目　フリードリヒ・キットラーの理論の発展過程：筆記、感覚、数
氏名　　梅田　拓也

ドイツのメディア理論家フリードリヒ・キットラー（Friedrich Kittler, 1943–2011）は、現代のメディア研究・文化研究に対し広範な影響を与えたことで知られる人物である。彼の研究は、古典主義・ロマン主義時代のドイツ文学の批評から出発し、古代のアルファベットからコンピュータに至る様々なメディア史の再記述へと展開した。このような多種多様な研究対象を論じる中で、彼が自身の議論をどのように一貫ないし変化させてきたのかが問題となる。しかし彼は、自身のテクストで言葉遊びや皮肉によって挑発的に読者を思考に誘うことを好んでおり、自身の理論的前提に明示的説明を与えることを避けていた。

キットラーの議論の解釈に取り組んできた研究は、彼の議論の解釈を主たる目的とする学説史的研究と、彼の議論の批判的継承を図るメディア研究・文化研究に大別することができる。①まず学説史的研究では、キットラーの議論を文学研究に取り組んだ初期、メディア史に取り組んだ中期、ヨーロッパ文化史に取り組んだ後期に分け、そのそれぞれの時期で展開された議論を振り返る作業が進められてきた。しかし初期から中期、中期から後期にかけて、議論がどのように連続・変化したのかが十分に論じられてこなかった。またキットラーの議論を、彼が参照した思想家の議論との異同から解釈する作業が進められてきた。しかし、ミシェル・フーコーやマーシャル・マクルーハンなどの著名な思想家との関係性に注目が集まる一方で、キットラーと同時代の学的文脈との関係は十分に取り上げられてこなかった。②またメディア研究・文化研究では、キットラーの議論はメディアの物質的性質を重視する理論として参照された一方で、そのような前提に基づいてメディア文化の多様性を捨象するものとして批判されてきた。しかし、これらの評価は彼の著作の断片的読解に基づいて進められてきたものであるため、より体系的な解釈を進めることで別の応用可能性を得ることが期待できる。

これらを踏まえ本稿は、キットラーの複数の著作や論考の比較検討を踏まえ、そこで展開された議論の発展過程を考究することを目的とした。本研究では、公刊された著作や論文のみならず、マールバッハ文学資料館に収蔵された手書き原稿とデジタルデータも収集し分析した。このために本稿は次の 3 つの読解方針を採用した。①まずキットラー自身が断片的にしか説明しなかった、彼の理論的視座の抽出を目指した。このために彼の複数のテクストを比較検討し、それらで取り上げられている文学作品や思想家の著作や歴史上の逸話からどのような一般命題が提起されているのか、それらの関連付けによってどのような理論が提示されているかを検討した。②この理論的視座の射程を検討するため、同時代の学問的・社会的文脈を精査した。彼がテクストの中で言及している同時代の文学・文化研究の文脈を精査し、彼の理論の狙いを考察した。③この読解作業を、主たる研究対象の変化に即し、(1)1800

年前後のドイツ文学の批評に取り組んでいた 1970 年代〜1980 年代前半、(2)1900 年前後の文学の批評を進めていた 1980 年代前半、(3)書物からコンピュータに至るメディア史に取り組んでいた 1980 年代半ばから 1990 年代、(4)同時代のコンピュータについて論じていた 1990 年代、(5)古代から現代に至るヨーロッパ文化史の再記述を図っていた 2000 年代の 5 つの時期の著作群に分けて行った。この 5 つの時期で提示された理論を、本稿第 1 章から第 5 章のそれぞれに分けて論じた。

第 1 章「文学と筆記」では、1970 年代から 1980 年代前半のキットラーが取り組んでいた 1800 年前後のドイツ文学の批評を検討し、次のことが明らかになった。①この時期のキットラーは、筆記行為をめぐる社会的前提を「書き取りシステム（Aufschreibesysteme）」と呼び、それを反復的に表象することで媒介・再生産するものとして文学を捉える理論を提示している（第 2 節）。②この理論が狙っていたのは、解釈学やフロイトの文学心理学などの伝統的な批評理論への批判と、ポスト構造主義（とりわけミシェル・フーコーとジャック・ラカン）の応用であった（第 3 節）。④この議論が展開された背景には、当時のドイツの文学研究における解釈学と批判理論の対立と、その影響下にあったポスト構造主義受容への批判があった（第 4 節）。これらのことから、初期の文学研究の中でその後のキットラーの議論を貫く「筆記（Schrift）」という主題が現れたことが明らかになった。

第 2 章「メディアと感覚」では、1980 年代前半のキットラーの著作で展開された 1900 年前後の文学作品の批評を検討し、次のことが明らかになった。①この時期のキットラーは、1800 年前後の筆記行為をめぐる社会的前提の相対化を図るために、1900 年前後の筆記行為をめぐる諸前提の理論化を進めている（第 2 節）。この中で、1900 年前後に登場した技術的メディア（蓄音機、映画、タイプライター）によって、人間の身体感覚の分解と自律が起こるという視座が示された。②ここで彼がメディアと身体感覚に着目した背景には、マーシャル・マクルーハンやフリードリヒ・ニーチェの議論との対峙や、最初期に進められていた文学作品の試行的読解があった（第 3 節）。③またこの議論は、同時期のドイツの文学研究を取り巻く社会的状況や、若手世代による批評理論をめぐる議論（ポスト構造主義の応用、トロント学派の再評価、フロイトの再評価）から影響を受けて進められていた（第 4 節）。これらのことから、キットラーがメディアを論じる中で「筆記」の主題を深めたことと、メディアに記録される「感覚（Sinne）」という主題を発見したことが明らかになった。

第 3 章「システムとの戦争」では、1980 年代半ばから 1990 年代のキットラーが進めたメディア史研究を検討し、次のことが明らかになった。①この時期のキットラーは、古今の様々なメディアの歴史（書字、印刷、蓄音機、映画、タイプライター、ラジオ、テレビ、コンピュータなど）を、軍事史との関係を強調しつつ、自律的なデータ処理システムの発展過程として理論化している（第 2 節）。②この議論は、ニクラス・ルーマンを起点として同時期のドイツの社会学や文学研究で進められていた、システム理論の応用動向に影響を受けていた（第 3 節）。③またこの議論は、トマス・ピンチョンの作品の批評やポール・ヴィリリオの技術哲学を経由し、冷戦体制下のヨーロッパの社会不安を反映させるかたちで展開さ

れていた（第 4 節）。これらを踏まえ、キットラーがメディアシステムの理論を提示する中で、それまで探求してきた「筆記」と「感覚」という主題をさらに深め、さらに「数（Zahl）」という主題に取り組むようになったことが明らかになった。

第 4 章「数とハードウェア」では、1990 年代のキットラーによるコンピュータ論を検討し、次のことが明らかになった。①この時期のキットラーは、コンピュータの本質をその数的処理に見出し、それをもたらした数学的原理やマイクロチップの技術的性質に着目していた（第 2 節）。②彼はこのような理論によって、当時のドイツ人文学における「物質性」をめぐる議論への批判的な応答を試みていた（第 3 節）。③また彼はプログラミング学習の経験を踏まえ、当時の IT 産業とプログラマーの関係性への理論的介入の必要性を訴えていた（第 4 節）。これらのことから、キットラーがデジタルメディアをめぐる現在的問題の中で、「数」の主題を深めたことが明らかになった。

第 5 章「記号、快楽、思想」では、2000 年代のキットラーによるヨーロッパ文化史を検討し、次のことが明らかになった。①この時期のキットラーはヨーロッパの文化史を、快楽と記号の再帰的発展に突き動かされながら、常にそれを抑圧し続けるプロセスとして理論化していた（第 2 節）。②この理論が狙っていたのは、フリードリヒ・ニーチェの『悲劇の誕生』の議論、マルティン・ハイデガーの「形而上学の破壊」の構想、そしてヨハネス・ローマンの『音楽とロゴス』の成果の継承と更新であった（第 3 節）。③さらにこの理論は、同時期のドイツで展開された「文化技術（Kulturtechnik）」の研究に影響を受けて構築されたものであった。

以上の議論を踏まえ、本稿はキットラーの理論の発展過程について、次のような結論を導いた。まず本稿はキットラーの理論の通時的変遷を明らかにした。手短にまとめると、①彼は最初期から「筆記」＝情報の保存・伝送・処理という局面の自律性を訴えており、その関心に基づいて歴史上存在した様々な情報記録のあり方を考究した結果、②1980 年頃から「感覚」＝人間の絶対的所与でありながら技術によって初めて把捉可能となる情報に着眼し、③1990 年頃から「数」＝人間の知覚や思考から独立した形式的記号の機械的処理に着眼するようになった。つまり彼は、非常に多様な対象を組み込みながらも、一貫した理論的関心を探求していることが分かる。またこのような理論を展開した背景には、ドイツの文学・文化研究における先行世代の理論（解釈学、フロイトの精神分析、批判理論）への批判と、新しい理論（ポスト構造主義、トロント学派）の応用、そして同時代の社会的状況（文学研究のイデオロギー批判、冷戦下の世界情勢、デジタルメディア文化の勃興）への応答があった。したがってキットラーの議論は、同時代のドイツの学問的・社会的文脈をめぐる様々な言説の結節点として捉えられる。